



中部の

エネルギーを 築いた

人々

電灯・電鉄兼営の

愛知電気鉄道の功労者 **藍川清成**

藍川清成は、1872(明治5)年、岐阜県厚美郡小熊村(現在：岐阜市大門町)円龍寺の藍川清通の長男として生まれた。1895(明治28)年、東京帝国大学法律科を卒業し、翌年、名古屋市で弁護士を開業した。その後、官選弁護人や会社、銀行の法律顧問などを努め、30歳にして名古屋市弁護士会の会長にも推挙された。

当時、電灯電力と電気鉄道事業の黎明期で、藍川は名古屋電灯株の顧問弁護士から、日本の電力王・福沢桃介と懇意になり、形影相応じて福沢なければ藍川なしと言われるようになった。そして名古屋電灯株取締役(1907・明治40年)、愛知電気鉄道株取締役社長(1917・大正6年)、大同電力株監査役(1921・大正10年)、三河水力株取締役社長(1932・昭和7年)、岡崎の中部電力株取締役会長(1934・昭和9年)、現在の名古屋鉄道株取締役社長(1935・昭和10年)に就任し、電灯事業から電鉄事業に進み、戦後の1947(昭和22)年に実業界を引退し、翌年に亡くなった。

このように中部経済圏の発展に大きく貢献した藍川清成の生涯の一端と電灯・電鉄を兼営する愛知電気鉄道時代の知多半島の電気事業を紹介する。



藍川清成
(出典：名古屋鉄道百年史)

名古屋電灯株から愛知電気鉄道株の設立

藍川は、名古屋電灯の監査役に1904(明治37)年、取締役役に1907(明治40)年に就任した。この時期は東海電灯の合併、木曾川の水利権に関わる行政訴訟、長良川水力発電所建設工事、名古屋電力の創立など名古屋電灯の最も多難な時代であったが、名古屋市の発展に調子を合わせた一大飛躍時代であった。しかし、業績が悪化したため1910(明治43)年に重役陣が総退陣し、藍川も辞任したが、退任後も顧問弁護士として経営に携わった。この時に福沢桃介が名古屋電灯の常務に迎えられた。

愛知電気鉄道は1910(明治43)年に設立され、岩田作兵衛が初代社長に藍

川が監査役に就任した。そして熱田～常滑間の鉄道敷設を計画し、先ず、知多半島西岸の名古屋熱田伝馬町～大野町間の鉄道敷設工事を始めた。



盛岡発電所の全景(出典：水カドットコム)



盛岡発電所の発電機

電力については、当初、火力発電所の建設を考えていたが、変更して名古屋電灯との間に電力購入契約を締結した。また、知多半島には文明の利器である電気がなかったので電気事業の兼営を考え、電気供給事業の兼営許可を出願し、翌年許可を得た。そして、1912(明治45)年2月11日に、知多半島西岸の横須賀・岡田・大野・常滑・西浦の各町と現在名古屋市の鳴海・有松・大高の各町に送り、同年5月末までに三和・鬼崎・上野・旭・

八幡の各村に点灯区域を拡張し、電灯数：3,919灯、動力：78馬力に達した。

この電力は、巴川水力発電所(現在：中部電力・矢作川水系盛岡発電所、当初出力：750kW・増設後：970kW)から600kW受電し、名和変電所(上野村)、日長変電所(旭村)を設け、両変電所とも電鉄用に150kW、電灯・電力に150kWを供給した。

開業当初の業績は順調であったが、その後の不況と沿線拡張の設備投資資

金調達ができなく経営不振となり岩田社長が辞任した。藍川は、後任に福沢桃介を推薦した。福沢は、初めあまり乗り気でなかったが、鉄道と電気事業は人生の幸福をもたらす公益事業だという信念を平素から持っていたので、藍川の懇願を受け入れ社長に就任した。そして不況を切り抜け、会社の業績が回復した1917(大正6)、福沢は辞任を申し出て、後任に藍川を推薦した。

東海道電気鉄道(株)の構想から名古屋鉄道(株)の誕生

福沢桃介は東京～大阪間に電気機関車による高速電車を走らせる構想を持っていたので、1917(大正8)年、東海道電気鉄道を設立した。そして名古屋を中心に東京、大阪方面へ伸長させる計画で綿密な調査を始めた。しかし、当時の国情として東海道に2本の並行鉄道を敷設するのは時期尚早であるとの意見があった。また、安田善次郎が1919(大正10)年に大磯の別荘で刺殺されたため、資金

の保証ができなく経営に行き詰まり、愛知電気鉄道に吸収合併された。その後、愛知電気鉄道は、東海道電気鉄道の免許権を引継ぎ豊橋まで線路を延長した。

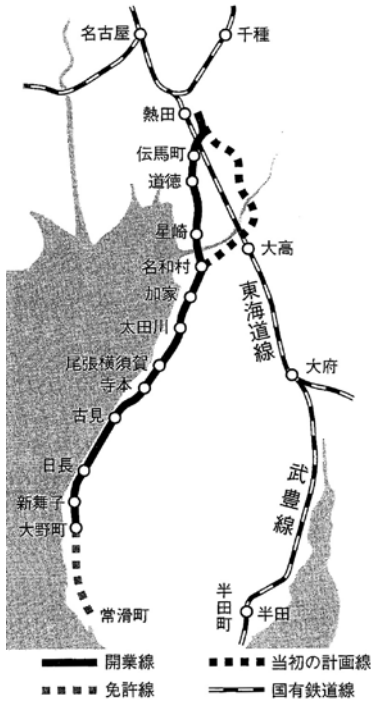
1935(昭和10)年、名古屋～岐阜間の名岐鉄道と名古屋～豊橋間の愛知電気鉄道が合併し、社名を名古屋鉄道と改め、藍川が初代の社長に就任した。

知多半島の電気事業

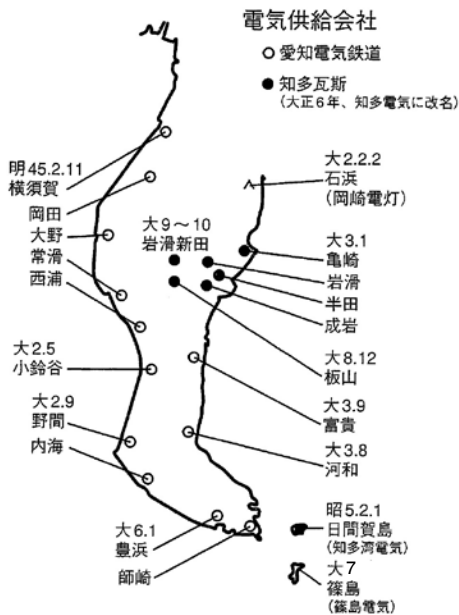
知多半島の行政区は、東海市、大府市、知多市、常滑市、半田市、知多郡の東浦町、阿久比町、武豊町、美浜町、南知多町の5市5町である。

1910(明治43)年、愛知電気鉄道(株)が知多半島に最初の電気事業を興した。その後明治、大正から昭和の初期にかけ、知多半島には、愛知電気鉄道、知多瓦斯、岡崎電灯、篠

最初に開通した
伝馬町～大野町間の路線



電灯の普及



最初に開通した伝馬町～大野町間の路線と電灯の普及
(出典：名古屋鉄道百年史)

島電気、知多湾電気の5社が電気を供給した。

(1) 愛知電気鉄道株

初めは鉄道沿線の周辺町村に供給していたが、その後、西浦、有松変電所を新設し、大正6年には半島先端の師崎まで送電され、半島の全町村に順次電灯が普及した。

第一次世界大戦後の大恐慌時代を迎え、全国的な電気事業統合の流れの中で、発電設備を持たない地域の供給を維持することが難しくなったので、同社の電灯事業を東邦電力へ譲渡することとなった。1930(昭和5)年、新たに愛知電力株を資本金350万円で設立し、電気事業をいったん新会社に引継ぎ、翌年東邦電力に譲渡した。

(2) 知多瓦斯株

明治43年2月、知多瓦斯(資本金:50万円)が中埜半助ら8名によって設立、同年3月、知多電灯(資本金:50万円)が中埜又左衛門ら11名によって設立された。しかし、知多電灯が機械の購入などで遅れている間に、知多瓦斯が国産機械に計画を変更して同年6月開業した。そして電灯に先駆けガス灯(583灯)を灯すとともに、熱用80口にガスを供給した。先を越された知多電灯は、開業を見合わせ、権利のすべてを知多瓦斯に譲渡して解散した。このように半田地方は、知多瓦斯が電気事業を兼業し、同社内にガスエンジン(125馬力)と発電機(60kW)を新設し、半田・成岩町などに送電した。

大正5年、同社内に300kW、60%の変電所を建設し、名古屋電灯株から300kWを購入し、新たに電力供給を開始した。大正6年に知多電気株と改名し、翌年、岡崎電灯株から100kWを購入し、亀崎町に変電所を設け、同町一帯に供給を開始した。その後大正10年に関西電気と合併し、翌年、東邦電力となった。

(3) 岡崎電灯株

東浦村は、地理的な条件から刈谷方面との

交流が多く、明治44年、刈谷に電気が灯ると、岡崎電灯(株)との間に電灯架設交渉を行い、大正2年に初めて電気が灯った。その後、大正7年に電力供給を開始するようになってから、モーターの普及によって織布業の工場生産が急速に近代化していった。

(4) 篠島電気(株)

大正6年、篠島電気(株)は地元の中村梅三社長らによって設立され、翌年開業した。石炭と木炭を燃料とするガスエンジンにより15kWの発電機を運転し、全島の半分の約250戸が、10～16燭光の電灯をつけた。

(5) 知多湾電気(株)

佐久島に電気を送っていた佐久島電気(株)は、昭和4年に知多湾電気(株)と改称し、翌年、日間賀島にガスエンジンによって15kWの発電機を運転し全島に電気を送った。

このように篠島・日間賀島・佐久島の3島はそれぞれの島で内燃力発電により電力を供給していた。昭和22年中部配電(株)は、戦後の物資の厳しい中であつたが、設備が老朽化し電圧降下が著しく、さらに燃料の購入が難しくなつたので、海底ケーブル(師崎片名～日間賀島～篠島・佐久島間=8,576^{メートル})を敷設した。
(寺沢 安正)

藍川清成の年譜(1872～1948)

1872	明治5	岐阜県厚見郡小熊村(現在：岐阜市大門町)藍川清通の長男として生まれる
1895	明治28	東京帝国大学法律科卒業
1896	明治29	名古屋市で弁護士開業
1901	明治34	名古屋市弁護士会長に就任
1904	明治37	名古屋電灯株式会社監査役に就任
1907	明治40	名古屋電灯株式会社取締役役に就任
1910	明治43	名古屋電灯取締役辞任(1月)、愛知電気鉄道株式会社監査役(11月)に就任
1913	大正2	愛知電気鉄道株式会社取締役役に就任
1914	大正3	愛知電気鉄道株式会社常務取締役に就任
1917	大正6	愛知電気鉄道株式会社取締役社長に就任
1921	大正10	大同電力株式会社監査役に就任
1924	大正13	三河水力株式会社取締役に就任
1931	昭和6	合同電気株式会社監査役に就任
1932	昭和7	三河水力株式会社取締役社長に就任
1934	昭和9	中部電力株式会社取締役会長に就任
1935	昭和10	名古屋鉄道株式会社取締役社長に就任
1938	昭和13	渥美電気鉄道株式会社取締役社長に就任
1939	昭和14	豊橋電気軌道株式会社取締役社長に就任
1945	昭和20	名古屋鉄道株式会社取締役会長に就任
1948	昭和23	死去